

教育センター便り

長野市教育センター
長野市大字鶴賀550番地2
TEL 026-226-7486
FAX 026-264-7570
責任者 今井 睦俊



からすが
きのえだを
くちにくわえた後
け虫と
こんにちは

佐藤威臣

あたらしい
いつもとちがう
うれしいことが
えがおで
おきるよかん

あいうえお作文

下氷鮑小学校

二年

倉崎真優

答えのない問い

長野市校長会長 横澤 秀信
(三陽中学校)



2学期も終盤を迎え、少しずつ卒業を意識する時期となった。その意識は、いわゆる卒業ソングを耳にすることで一気に高まる。これまで幾つもの名曲と共に、生徒たちとの別れを惜しんできたが、近年はRADWIMPSさんの「正解-18FES

ver.」が気になっている。青春の日々を振り返り、自立した生き方に向けての決意が感じられる楽曲である。歌詩の中で「答えがある問いばかりを教わってきたよ」「答えがすでにある問いなんかには用などはない」というフレーズが印象に残る。

私は、今から20年ほど前に、市内の中学校で長野市教育大綱研究指定校の研究に携わったことがきっかけで、市教育センターで学ばせていただいた。研究内容は、「長野市教育大綱『敬愛の心』の醸成を教科の学習を通して具現する」というものだ。簡単に言うと「教科の授業を通して学力をつけるとともに、豊かな心の育成を図る」であろうか。「教育大綱研究はそんな簡単で薄っぺらなものではない！」という大先輩の声が聞こえてきそうだが、私なりにこの答えの見えにくいテーマに向かって実践した。私の担当は数学なので、数学の授業を通して豊かな心の醸成を図ろうと考えた。キーワードは「追究に没頭」。公開授業では、中学校1年生で次のような学習問題により授業を行った。

「紙の厚さ0.02cmのトイレットペーパーが、直径4cmの芯に、直径10cmの大きさで、すき間なく巻かれています。このトイレットペーパー全体の長さを求めなさい。」

私らしく、何とも薄っぺらな問題だ。この問題の答えは、あまりスッキリしていない。しかし解法には、効率的なやり方があるので、私はそれに気づかせる幾つかの手だてを用意した。ところが、生徒たちは追究に入ると、トイレットペーパーを一周ずつ引き出して測る生徒、半径で切断して広げる生徒、ひたすら数字と格闘している生徒と様々。そのうちに生徒たちはペアやグループを作って話し合いながら、追究の手を緩めることなくあらゆる手段で答えに迫ろうとした。私が敷こうとしたルールには乗る気配も見せなかった。授業後の感想は「この問題で、考えることが今まで以上に身についた。いつもなら人にまかせたり、写したりしてあまり自分のためにならなかったけど、今回は今まで以上の力が出せたと思う。」「脳をフル回転して、それでも解けない問題だったが、答えにできるだけ迫ることが、とても楽しかった。」というものであった。正解を導けなくとも、考え抜くことに価値を見出した生徒たちの姿に、頼もしさを感じた。

「正解」のRADWIMPSさんは最後にこう歌う。「制限時間はあなたのこれからの人生 解答用紙は… 採点基準は…。生徒たちは「どう生きるか」という答えのない問いに対して、やがて自ら深く考えなければならない時が来るだろう。「生徒たちの未来のために、私たち教師に何が出来るか」これにも正解はなく答えのない問いである。だからこそ自分なりの正解を求め、学び続ける教師でありたい。

研修講座（理科教育センター）

教育センターの分館として、教職員講座「興味や疑問を生かす理科授業づくり」を行いました。

5月16日に小学校3・4学年講座を実施

	講座名	内容
1	「閉じ込められた空気と水の性質」	ペットボトルロケットの仕組みを理解して、実際に打ち上げてみました。
2	「豆電球の世界をのぞいてみよう」	豆電球にかかる電圧から、電圧を視覚的に捉えるまとめをしました。
3	「昆虫の育ち方（タブレットを利用した観察と記録）」	カブトムシの成長段階を確認し、タブレットで記録できるよう、使い方を学びました。

◇受講者の感想から

- ペットボトルロケット、昆虫の飼育など、基本的な教材研究ができて勉強になりました。
- 一人ひとり実験しながらのわかりやすい講座でした。子どもたちに理科の楽しさを伝えたいです。
- 目からうろこ・・・の内容でした。なんとなくではなく、しっかりと理解できたと思います。

5月18日に小学校5・6学年講座を実施。

	講座名	内容
1	「ものの燃え方と空気」	気体の成分を変化させて物の燃え方に変化が表れるか実験しました。
2	「雲の発生を体験しよう」	雲の発生を体験し、寒冷前線のモデル実験を実施しました。
3	「タブレットを利用した観察と記録（季節の星座観察）」	タブレットにマクロレンズを装着することで、活用の幅が広がることを実習しました。

◇受講者の感想から

- 中学校との関連も理解することができ、小学校での実践がより深まると思いました。
- 予想を立て、仮説をもって、実際に確かめることの大切さを改めて感じました。
- 授業で扱ってみたいと思う教材ばかり紹介していただきました。お土産もありがとうございます。

(早川 和仁)

キャリアアップ研修II「教師力向上研修」

～未来に向けて必要な力をつけるためには～

キャリアアップ研修II「教師力向上研修」では、前半は、『ミドルリーダーとしての教師の在り方』をテーマに、信州大学の小山茂喜教授を講師に招き、講義を行いました。後半は、『教科横断的な視点でのカリキュラム・マネジメント』をテーマに教育センターの指導主事が演習を行いました。

前半の講義では、社会が大きく変化する中で学校に求められている役割やミドルリーダーに必要な力、そのための考え方や具体的な方法について、小山教授の体験談を交えながらお話いただきました。

◇受講者の感想から

- 学校のミドルリーダーとして、PDCAの各段階で、リーダー的機能、マネージャー的機能、メンターの機能を担っていく存在になれるよう、できるところから努力していきたいと思いました。自分の持ち味は何かを見出し、自分らしく学校全体のために動いていくことが大切だと分かりました。
- 小山先生の講義のなかで、学校での勤務年数が長くなるほど、学校としての課題が見えにくくなっていく、1年目の先生方の意見をしっかりと吸い上げていくことが大切だというお話が印象に残りました。学校を運営する立場の一人として、意見を発信するだけでなく、拾い上げて生かしていく役割をしっかりと担っていかなければと感じました。



後半の演習では、教育センターで作成した、『カリマネハンドブック』（教育センターホームページからダウンロード可能）をもとに、自校の取組のよさや改善策をミドルリーダーの視点で考えました。

◇受講者の感想から

- 学校は、規模や環境によって、雰囲気や児童の様子が大きく変わる。その場、その児童に合わせた実践をするため、カリキュラム・マネジメントを充実させることは大切だと思いました。
- グランドデザインは、改めて読み直す学びの系統性、地域の教育資源や教育環境、生徒の実態を確認することができるということを知りました。今ある環境を生かして改善策を考えたりして、自校のよさを改めて感じることができました。

(小林 由起子)

キャリアアップ研修Ⅳ キャリアUPIV ー人生100年時代構想ー

長野市教育センターでは、キャリアステージに応じた研修を行っています。職能期において、「深化・貢献期」にあたる50、60代の先生方を対象に、「キャリアアップ研修Ⅳ」を実施しています。今年度も下記のような内容で講座が行われました。

【研修講座の内容】

講義と演習「マイスターへのキャリアパス」

- ①これまでの教職人生を振り返る
- ②これからの教職人生を考える
- ③アフター教職人生を展望する

講師 信州大学特任教授 青木 一 氏

まさに、人生100年時代。50、60代の先生方にとって、自分を真正面から見つめる研修となりました。



◇受講者の感想から

- ・終わりを意識して、なんとなく今後を考え始めていたので、今回の講座をきっかけに、戦略的に自分をカスタマイズしていく必要性を強く感じました。
- ・自分のキャリアについて振り返るよい機会となりました。また、これから何を学ぶべきかを考えさせられ、意欲が出ました。
- ・本講座を受けて、自分の教員人生を振り返ったり、ベテラン教員の特性を知り、自分だけではないと安心したり、これからのためにできそうなことがあると再発見できたように思います。

定年退職が、延長されていく今日、今後の教職員人生を考える機会はとても重要となります。そして、教職員人生の後の人生を展望することも一層重要となります。

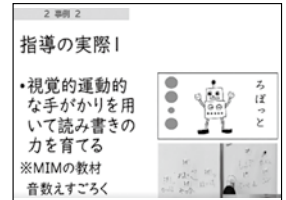
50代の先生方は、自分のこれまでを振り返り、今後は展望することができる「キャリアアップ研修Ⅳ」をぜひ受講してほしいと考えます。

(宮澤 剛彦)

校内に広げよう特別支援教育①②

通常の学級における特別支援教育について理解し、インクルーシブ教育を進めていただきたいと考えています。

①では「通級による指導と通常の学級との連携」という内容で、連携についての市教委指導主事の講義とLD等通級指導教室及び言語障害通級指導教室での実践をオンデマンドで視聴していただきました。



◇受講者の感想から

- ・通常学級の生徒の中に、学習や行動の面で困難を示したり、困難に近い状況であったりする生徒が一定数いることは感じていたが、そのような生徒たちへの手立てとして通級の存在があり、どのようなことが行われているのかを知ることができた。
- ・通級児童の課題や苦手としていることを把握して、適切な活動を設定するために、学級担任と通級指導教室の担当との連携が大切だと感じた。
- ・「吃音児童への言葉がけ」について、その児童にとっての「自然な話し方」なんだ、という意識を私たち自身が持ち、学級の子どもたちと共有していく必要があると感じた。

②では「読み書きの困難な子への支援」という内容で信州大学教授 高橋知音先生の講義をお聞きしました。

◇受講者の感想から

- ・学校に行けない、教室に入れないお子さんが本校でも増えている。本講座でお聞きしたように、LDなどの発達障害が疑われることが多い。子どもたち一人一人のアセスメントを行い適切な支援をしていきたい。
- ・小学生からたくさんの支援を受けうまくいった経験をたくさんすることで自己理解もすすみ、自信をもって社会に出ていかれると思う。LDが見過ごされないように努力したい。早い段階で教師が子どもたちのつまずきに気付き、適切な支援を継続的に行っていくことの重要性を改めて感じた。

通常学級でも特別支援学級でも、児童生徒一人一人に合った適切な学びを積みかさねて成長してほしいと願っています。そのために先生方が特別支援教育の理解をより一層進めてほしいと思います。

特別支援教育の校内研修に教育センターの研修動画をご利用ください。市内小中学校実践や講義を研修動画として準備しています。教育センターへご連絡ください。

(大上 みどり)

～教育研究委員会の授業公開から～

道徳教育研究委員会 寺尾小学校6年 公開授業から

道徳教育研究委員会では、「自己を見つめ、他者と関わりながら、よりよく生きようとする児童生徒の育成」をテーマに実践研究に取り組んできました。

【授業者の自己課題】

子どもたちが、自分の考えをもち、他者の価値観に触れて、さらに自分の考えを深める道徳の授業

<6年「ロレンゾの友達」【友情・信頼】の授業から>

授業者は、自他の意見を照らし合わせ、多面的・多角的に考え、互いの考えのよさや違いに気付くことをねらい、次の活動を仕組みました。

【自己課題に対する手だて】

- ・中心発問に対する自分の考えを、5段階の中から選ぶ活動を行う。
- ・グループでの議論を活発にするため、互いに聞き返す時間を設ける。

ロレンゾから二十年ぶりの再会に招待された3人の友人は、約束の日を前にロレンゾが警察に追われている噂を耳にします。もしも噂が本当ならどうするかを話し合う3人について、誰の考えが自分の考えに一番近いかを考える活動の後、授業者は、「3人で話し合ったことは本当の友情といえるのだろうか。」と発問しながら、その回答を“いえる”から“いえない”までの5段階に分けた図を示して、自分の考えに一番近いものを選ぶようにしました。

グループ活動において、A児とB児は、“いえる”を選び、A児は「友達のためを思って、どうしたらいいのか3人で話し合ったのだから、本当の友情といえると思う」と発言しました。C児が“どちらかというといえる”を選んだことを聞いたA児は「どうして“どちらかという”なの？」と聞き返しました。C児は「最初は“わからない”にしようと思った」と話すと、A児やB児が「ロレンゾを信じてなかったとしても、ロレンゾのために一生懸命考えていた」、「ロレンゾを待っていたことが信じている証」などと意見を述べ、C児は最終的に“いえる”を選択しました。自分の考えを5段階から選択し、選択した根拠についてグループで発表し、問い返す時間を設けたことで、友だちの考えから多面的・多角的に自己の考えを広げていったC児の姿がありました。



【グループでの意見交換】

◇参観者の感想から

5段階にしたことで、自分の考えをはっきりさせ、それぞれの根拠の違いについて話し合える有効な手だてだと感じました。

(秋山 拓也)

国語科教育研究委員会 芹田小学校4年 公開授業から

国語科教育研究委員会では、「自らの学び・友との学びの楽しさを実感できる国語の授業～学びの連続性に視点をあてて～」をテーマに実践研究に取り組んできました。

【授業者の自己課題】

個の追究と友との追究を通して、学びの楽しさを味わい、自分の力の伸びを感じられる授業の在り方～言葉に目を向けて～

<4年『ごんぎつね』の授業から>

授業者は、子どもたちが叙述に注目して登場人物の気持ちの変化を捉え、友と考えを伝え合う中で共通点や相違点に自ら気付くことにより、友と物語を読み深めるよさや楽しさが感じられる授業を目指して、次の活動を仕組みました。

【自己課題に対する手だて】

- ・ごんと兵十の心の距離や、兵十の気持ちの変化などの考えを整理するための学習カード。
- ・タブレット端末や学習カードを用いて、友と考えを共有する場面の設定。

『ごんぎつね』の6の場面を音読した児童たちは、兵十の言動に関する表現が前の場面よりも増えていることに気付きます。そこで授業者は、6の場面でのごんと兵十の気持ちの距離を、ムーブノートのスタンプ機能で入力するように指示します。そして、集計の結果、ごんと兵十の心の距離は、前の場面よりも近くなったと考えている児童が多いことが分かります。

A児は、兵十の気持ちが変わった部分を「火縄じゅうをばたりと取り落としました」と考え、その理由を「ごんがいつもくりやまつたけを持ってきていたと気づいたところだから」と学習カードに書きます。その後のグループ共有で友との共通点や相違点に気付いたA児は、友の考えも取り入れながら、自分の考えを「心のきよりグラフ」にまとめます。

全体共有の場面でも、友との考えの違いに気付いたA児は、「えっ」と声を出し、隣の友と確認をします。そして、全体発表をする友の言葉から、ごんにも兵十にも後悔の気持ちがあること、しかし、その気持ちに至った行動の罪の重さには違いがあることに気付きます。タブレット端末や学習カードの活用、教師の声掛けや問い返しなどの支援により、児童同士が関わることで考えを広げていく姿がありました。



【グループでの話し合い】

◇参観者の感想から

友と同じ考えだと気付いた児童は、自信をもって全体の場面で発表をしていました。違う考えに気付いた児童は、どうしてそう考えたのかを問い返して考えを広げていました。追究の過程や話し合いの様子に、日々の学習の積み重ねが表れていました。

(小林 由起子)

算数・数学科研究委員会
古牧小学校1年 公開授業から

算数・数学科研究委員会では、「子どもたちの主体性を育む算数・数学の支援～自ら追究し、振り返り調整することを通して～」をテーマに実践研究に取り組んできました。

【授業者の自己課題】

子どもが数学的な見方・考え方を働かせながら、自分の考えを数学的に表現する教材の研究～言語活動の充実を目指して～

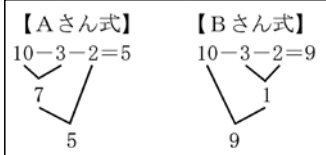
<1年「3つの かずの けいさん」の授業から>
授業者は、数学的な見方・考え方を働かせている子どもたちが、数学的な表現を用いて自分の考えを語る姿を願い、以下の手だてをもとに授業を構想しました。

【自己課題に対する手だて】

- ・ことばと計算（演算記号）の関係の揭示
- ・目的意識をもって説明することができるようにするための問題場面の設定
- ・ブロックの操作を根拠にしなが説明することができるようにするための誤答の提示

本時では、ねずみがバスに乗降する場面をもとに、「降りて、降りる」場合の答えの求め方を考えました。児童たちは、これまでの学習を振り返り、「『乗った』はたし算、『降りた』はひき算」ということばと計算（演算記号）の関係の揭示をもとに「10-3-2」という式を立てました。そこで教師は、前時の「乗って、乗る」場合でまとめた「前から順に計算するAさん式」と「後ろから計算するBさん式」の考え方を想起させ、「今回もAさん式、Bさん式が使えるかな」と問います。児童からは「使える」「使えない」両方の声が挙がり、追究が始まりました。

Aさん式とBさん式の両方で追究をしたC児は、二つの考え方の答えが異なったことから、ブロックを操作して得られた結果を根拠に「答えは5になるはずなのに、Aさん式は5で、Bさん式は9になってしまうのでBさん式は使えない」と説明しました。



【説明するC児】

また、D児は、振り返りの場面で計算結果と問題場面を関連付けて「減って減るときは、前から計算しないといけない」とまとめることができました。

◇参観者の感想から

「前はできたのに、今日ではできない」という体験が、児童の「説明したい」という思いやブロックを使う必要感を高めたように感じました。

(宮本 常德)

理科研究委員会
緑ヶ丘小学校4年 公開授業から

理科研究委員会では、「子どもが主体的に問題を考えていく理科学習」をテーマに実践研究に取り組んできました。

【授業者の自己課題】

子どもたちの願いから学習問題を設定し、子どもたちが「おもしろい」を実感できる授業を行っていきたい。

<4年「電流のはたらき」の授業から>

授業者は、2個の電池を使って回路を組み、モーターカーのタイムを計測することを通して、モーターを速く回転させるつなげ方を見出すことをねらいつた活動を計画しました。

【自己課題に対する手だて】

- ・前時の発言やつぶやきからの課題設定
- ・ICT機器の活用
- ・自分の言葉で表現する振り返り

1個の電池でモーターカーを走らせタイムを計測した子ども達が「モーターカーを速くするには、乾電池2個とモーターをどのようにつなげるのか」を学習問題とし、電池の向きやつなげ方を予想しました。

Jam boardを用いて予想した回路を共有し、電池の向きやつなげ方に着目することができました。そして、子ども達は、自分の予想した回路を早く試したい様子で、実験会場の体育館まで早足で進んでいきました。

実験の場面では、グループの仲間と協力しながら、「やっぱり速くなった。」と自分の予想を確かめたり、「こっちのつなげの方がいいよ。」と友と意見交換をしたりしながら実験していました。



端末で記録しながら実験する様子

また、モーターカーが少し曲がったときやスタートのタイミングが合わなかったときは、何度も計測をし直して、納得のいく値になるように再実験する姿もありました。

今回の授業では、子ども達の願いから学習問題が設定されており、主体的に追究していく姿が多く見られました。また、ICT機器を活用して、予想や考察を共有できたことも子ども達の追究を協働的なものにしていました。さらに、終末の考察の共有やふりかえりの場面に時間をかけて、今回学んだ直列回路、並列回路と生活体験が結びついていくようになっていくとよいと感じました。

◇参観者の感想から

子どもの願いから学習問題を設定したり、ICTを活用して意見共有したりしたことが、子ども達の主体的な学習に結びついたらと感じました。

(末松 辰規)

新しい研修制度と「研修受講履歴記録システム及び研修プラットフォーム」

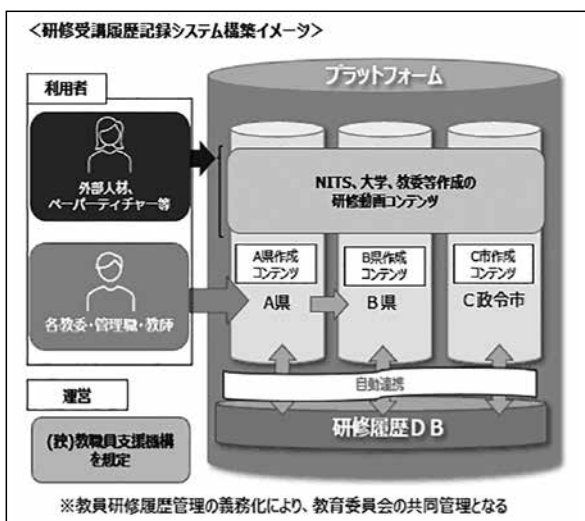
令和5年度から新しい研修制度が始まっています。

つまり、教育公務員特例法及び教育職員免許法の一部を改正する法律（令和4年法律第40号）により、教師の研修履歴の記録の作成と当該履歴を活用した資質向上に関する指導助言等の仕組みが、令和5年4月1日から施行されているのです。

そこで求められている「新たな教師の学びの姿」は、社会の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて「学び続ける教師」の姿であり、研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励のもと、一人一人の教師が、自らの専門職性を高めていくことを自覚しながら、主体的に研修に打ち込むことが求められています。

この新たな研修制度の下で、教師の個別最適な学び、協働的な学びを実現するためには、デジタル技術を活用し、効果的な記録作成・閲覧を可能とするとともに、豊富な研修コンテンツの中から、いつでも、どこからでも必要な研修を受講できるプラットフォームを整備する必要があるとして、文部科学省は、全国規模の「研修受講履歴記録システム及び研修プラットフォーム」の構築を急ぎました。そして、9月末に、このシステムの共同利用希望の都道府県及び政令指定都市を締め切ったところ

です。長野県教育委員会は、このシステムの共同利用を希望し参加する方向です。長野市としては、これから他郡市へ出られる先生も、他郡市から来られる先生も困らないように、県と同時に足並みをそろえて、このシステムに参加運用できるように準備を進めていく予定です。



文部科学省は、令和6年4月からの運用を目指しており、来年度からシステムは稼働する予定ですが、完全にシステム上で研修の申し込みや受講受付、履歴の記録蓄積等を行うには、データの整備や登録にかなりの準備が必要であり、県は、6年度については、長野県の教員の

登録をして、まず、プラットフォーム上の優良な研修コンテンツで、先生方が自由に自主研修できる状況まで整えたいということです。

【これからどのように変わっていくのか】

一番大きな変化は、教職員支援機構、各教育委員会、大学、民間等が提供する優良な研修コンテンツの中から、いつでも、どこからでも必要な研修を受講できるようになり、先生方が必要に応じ、タイムリーに自己研鑽できるようになること、そして、自動的に受講履歴として記録されていくことです。

また、法定研修については、徐々に形態は変わっていくと思われていますが、現在のところ大きな変更はなく、やがては、システムを通して受講申し込みをして、受講後、システムに受講記録が記録されていく形となります。

【システム稼働後のイメージ】

- ①インターネット上に教員一人一人のマイページが構築され、個人端末やスマホから自分のマイページにアクセスでき閲覧可能になる。
- ②マイページを開くと、長野市教育センターの研修講座情報やプラットフォームで公開されている講座やコンテンツ情報が閲覧できる。
- ③マイページから教育センターの研修講座やプラットフォームの研修講座の申し込みをする。
- ④受講を終了すると自動的に講座情報と共に受講履歴記録システムに記録される。（システム外で受講した研修等は手動で登録可能）
- ⑤マイページから自分の研修履歴をいつでも閲覧や出力が可能になる。

教育センターとしては、システムへの参加運用に向けて県教委と連絡を密にし、同歩調で準備を進めていく中で、先生方がスムーズにシステムを活用できるようにしていきたいと考えています。

システムの研修履歴が使えるようになるまでは、引き続き、「私の研修」を配布し、研修計画の立案や履歴の記録を支援していきます。また、システム稼働後の研修履歴の整合性が取れるように、「育成指標」を長野県の「育成指標」に合わせていきます。

システム運用に向けては、まだ様々な対応が必要ですが、スムーズに進められるように情報発信してまいりますので、よろしくお願いいたします。

（文責：佐藤 文博）

編集後記

例年より早いペースでインフルエンザが流行しています。手洗いなどを徹底し、感染予防を心がけましょう。

来年もどうぞよろしくお願いいたします。